

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 山村 浩

本論文は、二〇世紀の哲学、文学、思想に深甚な影響を与えた哲学者フリードリヒ・ニーチェの主著『ツァラトストラはかく語りき』の主として第一部から第三部に焦点をあてて、ツァラトストラが語る、そのディスクールを読み解きつつ、新たな精神分析的解釈を試みようとするものである。

従来、ニーチェのこの著作は、狭義の哲学、文学のみならず、さまざまな立場からの読解がおこなわれてきたが、おおむねそれらは、そこに表出されている思想内容を、意味論的なレベルにおいて了解しようとする努力にとどまっていた。それにたいして論者は、主人公であるツァラトストラの言説を形づくっている、その基本的な構造を、アメリカの精神分析学者ハインツ・コフートの理論をかりて、心理的に再構成しようとする。その際に、論者は、『ツァラトストラ』のなかに、「自己」と「自我」という二つの心的審級が提示されていることに着目する。論者の表現をかりるならば、「自己」とは、「身体における無数の英知の共演とその有機的統一」であり、それにたいして「自我」とは、「社会的な関係の結節点に生起するもの」である。「自我」は、「自己」の「比喻であり、記号であり、またその兆候である」とされるが、他方で社会的な価値を内在化させ、構造化させることによって、本来的な「自己」を疎外もする。こうした「自我」のたえざる更新が、ツァラトストラによって「自己超克」と呼ばれるところのものであり、いわゆる「超人」の生成も、このような心的モデルにおいて理解されることになる。

コフートのいうところの「自己」は、ニーチェの「自我」に相当すると論者は指摘する。幼児のみならず、大人もまた、この社会的な関係のレベルにおいて、みずからの語る言葉が聞かれる、内なる他者をもつという。そうした「語る＝聞かれる」という関係においては、言葉は、意味論的な伝達に仕えるのではなくて、ただそうした言語行為を遂行するためにこそ、使われるのである。言語使用のこうした様相が、ツァラトストラが弟子たちにたいして有している関係に出現していることを、論者は、たとえば二人称の用法を詳細に分析することによって、逐一、証明していく。その論の展開は、文学研究における作品解釈の一例として、きわめて優れたものである。

なるほどこうした方法をもってしては、『ツァラトストラ』の第四部を扱うことができず、またツァラトストラのディスクールを分析するにあたっては、当然、顧慮されるべき福音書にたいする言及が欠けているなど、本論文に瑕疵がないわけではないが、ドイツ語圏においても類例をみない、新しい視点からこの著作を解明することに成功している点は、十分に評価されるべきものである。以上に鑑みて、本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に相当するものと判断する。